文学資料コーナー　昨年の展示

2021.5.7 ～ 2021.7.4	開館二周年記念展示 全円の歌人　大西民子 ―沖ななも先生と民子の歌をよむ―	歌人・沖ななも氏の著書『全円の歌人　大西民子論』とともに、民子の自筆資料等を展示
2021.7.7 ～ 2021.9.4	歩き続けた日―民子と戦争―	戦時中のことを回想した民子の歌を展示
2021.9.7 ～ 2021.11.4	作家たちがみた大宮 (1)大宮公園と文学者たち	大宮公園にゆかりある文学者を作品を紹介するとともに、昔の大宮公園の写真をパネルで展示
2021.11.11 ～ 2022.1.4	あこがれはピアニスト ―民子と音楽―	民子愛用のピアノや所蔵していたレコードのほか、音楽について歌った民子の自筆資料を展示
2022.1.1 ～ 2022.1.31	特別展示 宮澤章二の年賀状―寅―	大宮ゆかりの詩人・宮澤章二の年賀状と新年の詩を展示
2022.1.7 ～ 2022.3.4	偉大な先輩 ―啄木に想いを馳せた民子―	民子に影響を与えた啄木の生涯の紹介、民子が選んだ啄木の歌の自筆原稿などを展示
2022.3.7 ～ 2022.5.4	民子、春を詠む ー花のにおい、風のささやきー	民子が詠んだ春の歌の、自筆原稿や短冊を展示

文学資料コーナー　今後の展示予定

2022.7.7 ～ 2022.9.4	埼玉の歌人たち ―短歌の八つの想い―	長年埼玉で活動する八人の歌人たちから自筆資料等の展示や作品を紹介
2022.9.7 ～ 2022.11.4	陸橋をこえて ー大木実と大宮ー	大宮ゆかりの詩人・大木実の自筆資料等を展示

大宮図書館　館長からのひとこと

桜の花びらが舞い飛んで行き、氷川参道の若葉が生い茂る季節となりました。大宮図書館は2022年5月7日、移転開館3周年を迎えます。今年の2月には来館者200万人を超え、幅広い世代の方々がそれぞれの目的で図書館を訪れ、この場所ににぎわいを生んでいます。

文学資料コーナーでは大宮市(現・さいたま市)で活動をつづけた歌人・大西民子の歌の魅力、さいたま市ゆかりの文学者たちの作品、大宮との関わりを様々な角度から切り取り、ご覧いただいたみなさまの心に響く企画展を開催していきます。

With コロナ時代、当たり前だったものが失われ、多くの新しい変化が起きました。大宮図書館は「みんなで育てる進化する図書館」として、引き続き新しい学びや楽しさを提供する場であり続けていきます。

馬渕忠秀館長

大西民子　(1924~1994)

戦後を代表する女流歌人のひとり。
岩手県盛岡市出身。25 歳の時に大宮へ移り住む。自身の日常生活を赤裸々に詠んだ第一歌集『まぼろしの椅子』で注目を集める。『風水』で迢空賞を受賞。紫綬褒章受賞。1994 年死去、享年 69。

2022 年 5 月 7 日
さいたま市立大宮図書館
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1
電話　048-643-3701　FAX　048-648-8460

つながる女流歌人

2022 年 5 月 7 日(土)～7 月 4 日(月)

No	種別	内　容
1	雑誌	「形成」昭和53年4月号　1978年刊行　形成社（民子所蔵） 掲載文「二階の妻」 大西民子　著
2	書籍	三ヶ島葭子歌集『吾木紅(われもこう)』三ヶ島葭子　著　1921年刊行・初版　東雲堂書店（民子所蔵）
3	自筆原稿	「三ヶ島葭子作品抄(大西民子選）」 大西民子　筆
4	自筆原稿	「着たるままにて」 大西民子　筆
5	書籍	『三ヶ島葭子研究』 枡本良・川合千鶴子・福原滉子・成瀬晶子　著 1976年刊行・初版　古川書房（民子所蔵）
6	書籍	岡本かの子歌集『愛のなやみ』 岡本かの子　著　1921年刊行・初版　東雲堂書店
7	書籍	岡本かの子小説『鶴は病みき』 岡本かの子　著　1936年刊行・初版　信正社
8	自筆巻子	かの子筆観音経　岡本かの子　筆　1939年10月
9	自筆原稿	「岡本かの子と万葉集：私のかの子をめぐって」 大西民子　筆
10	雑誌	「短歌」昭和42年5月号　1977年刊行　角川書店（民子所蔵） 掲載文「かの子と万葉集」
11	書籍	『花のかげ』 北見志保子　著　1950年刊行・初版　女人短歌會（民子所蔵）
12	雑誌	「女人短歌」第1輯(創刊号）1949年刊行　北見志保子編集・発行
13	雑誌	「月光」最終号(第6巻第5号）1944年刊行　月光発行所（民子所蔵）
14	書籍	「短歌」平成2年11月号　1990年刊行　角川書店（民子所蔵） 掲載文「北見志保子の歌」 大西民子　著
15	自筆短冊	「雲の峰ありとあらゆる蝉の身に熱の発して鳴きいづるころ」 与謝野晶子　筆
16	自筆色紙	「秋の風こよひのほそき月かげも愁とならできみにふけかし」 柳原白蓮　筆
17	自筆色紙	「傘かたげ背の子にみす天ぎらふそら鳴きわたる鴉のむれを」 原阿佐緒　筆
18	自筆短冊	「はや梅のさきいでけりとおどろきに似たるよろこびにこころのをどる」 茅野雅子　筆

資料はすべて大宮図書館所蔵です

参考文献

『歌人三ケ島葭子』長光菊枝/著　溪声出版　1984年
『岡本家の人びと-一平・かの子・太郎-(別冊太陽　日本のこころ94』 平凡社　1996年
『かの子の記　新版』岡本一平/著　チクマ秀版社　1996年
『現代短歌大事典』篠弘/ほか監修　三省堂　2000年
『歌ひつくせばゆるされむかも-歌人三ヶ島葭子の生涯-』秋山佐和子/著　TBS ブリタニカ　2002年
『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』さいたま市立大宮図書館/編　さいたま市教育委員会　2007年
『愛を貫き、自らを生きた　白蓮のように　柳原白蓮展図録』
柳原白蓮展実行委員会・朝日新聞社/編　朝日新聞社　2008年
『原阿佐緒-うつし世に女と生まれて-(ミネルヴァ日本評伝選)』 秋山佐和子/著　ミネルヴァ書房　2012年
『流転の歌人柳原白蓮-紡がれた短歌とその生涯-』 馬場あき子/ほか著　NHK 出版　2014年

1　苦悩への共感－三ヶ島葭子（みかじまよしこ）－

三ヶ島葭子歌集『吾木香』
1921 年刊行・初版　東雲堂書店（No.2）
葭子が生前唯一刊行した歌集

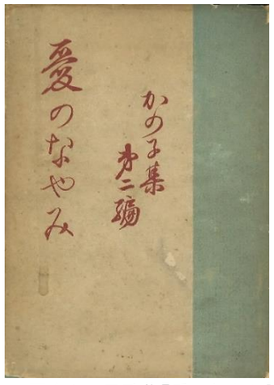
三ヶ島葭子は、1886(明治19)年、埼玉県入間郡三ヶ島村堀ノ内(現・所沢市堀ノ内)に生まれました。11歳の頃から短歌を作り始め、埼玉県女子師範学校に入学しますが、結核により中退を余儀なくされます。その後は代用教員をしながら歌を作り続けました。

29歳の時、ある歌人の紹介で結婚し娘を出産しますが、病気がちだった葭子は、我が子を夫の父母に預けることになってしまいます。さらに、夫は愛人を自宅に住まわせるようになり、葭子は苦しい立場に追い込まれていきます。貧困や孤独と戦いながらも、歌を作り続けた葭子は、脳出血を再発して40歳の若さで亡くなりました。

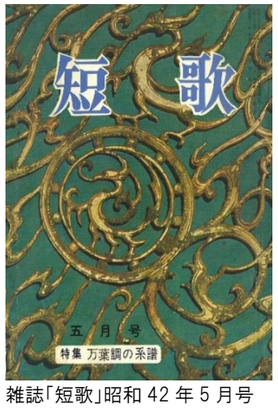
大西民子は葭子の才能を再評価し、女流歌人の中でも特に共感を寄せていました。民子自身にも夫の裏切りや離婚の経験があったことが影響していたのでしょうか。昭和53年に「形成」に寄せたエッセイ「二階の妻」(No.1)のなかで、「十五年前に三ケ島葭子の小伝を書いたときの私は、自分自身の境遇とかさねて考えてしまうせいもあって、泣く泣く作品を抄出したものであった」と書いています。

2　素顔のままに―岡本かの子（おかもとかのこ）－

岡本かの子は、1889(明治22)年、東京府赤坂区青山南町(現・東京都港区南青山)に生まれました。12歳から歌を詠み始め、1902(明治35)年に跡見女学院(現・跡見女子大学)に入学し、実兄とともに与謝野鉄幹（よさのてっかん）が主催する新詩社の同人に加わります。後年には、小説を書く機会が増え、さらに仏教に関する研究の分野でも活躍しました。また、かの子は、芸術家・岡本太郎の母としても知られています。



岡本かの子歌集『愛のなやみ』
1921 年刊行・初版　東雲堂出版（No.6）



雑誌「短歌」昭和 42 年 5 月号
1977 年刊行　角川書店（No.10）
民子がかの子について回想した
「かの子と万葉」が掲載された

奈良女子高等師範学校時代の民子は、かの子に熱中する友人の勧めで、次第にかの子の歌や書に親しむようになります。後年、かの子について執筆を依頼された民子は、雑誌「短歌」(No.10)のなかで、“かの子の短歌には飾り気のない素顔の彼女がにじみ出ていると感じられる”、“よく泣く女性だったそうで、彼女の短歌は流した涙そのものだったのでないか”、“世間から注目されていたかの子は、自分の人生も作品や芝居のように捉えていたように思える”、というような指摘をしています。

3　初めて出会った女流歌人－北見志保子（きたみしほこ）－

北見志保子は、1885(明治18)年、高知県宿毛村（すくもむら）(現・高知県宿毛市)に生まれ、ほとんど母親の手ひとつで育てられました。1903(明治36)年に上京した志保子は、1917(大正6)年には夫で歌人の橋田東声（はしだとうせい）が創刊した「珊瑚礁（さんごしょう）」に参加し、このころから歌を詠みはじめます。その後、志保子は奈良に滞在したことや、東大寺などの僧侶たちから教えを受けたことがきっかけで、奈良や仏たちを題材にした歌をつくるようになります。

雑誌『月光』最終号 1944 年刊行
月光発行所（No.13）
志保子が、歌人・川上小夜子とともに刊行していた短歌雑誌

志保子は、民子にとって生まれて初めて直接出会った女流歌人でした。奈良女子高等師範学校２年生の音楽会で、友人が志保子作詞の「平城山（ならやま）」を歌い、民子が伴奏したことがきっかけで、志保子の歌集を読むようになります。

志保子に傾倒していった民子は、思い切って手紙を出し、東大寺で待ち合わせをします。その後も民子は志保子と交流を続けていき、民子が後年書いたエッセイには、志保子と一緒に作曲家の平井康三郎（ひらいこうざぶろう）を訪れ、平井の伴奏で「平城山」を歌ったことが書かれています。

与謝野晶子自筆短冊
「雲の峰ありとあらゆる蝉の身に熱の発して鳴きいづるころ」（No.15）

4　同時代に活躍した女流歌人たち

三ヶ島葭子の生きた時代には、原阿佐緒（はらあさお）をはじめ、岡本かの子や柳原白蓮（やなぎはらびゃくれん）らの女流歌人が活躍していたと、民子は指摘しています。また、『みだれ髪』を刊行した与謝野晶子（よさのあきこ）は、葭子や阿佐緒を指導したこともあります。

大阪府で生まれた与謝野晶子は、「明星（みょうじょう）」第2号より参加し、歌集『みだれ髪』は歌壇に大きな影響を与えました。

東京都で生まれた柳原白蓮は、華族の令嬢として暮らし、佐々木信綱（ささきのぶつな）に入門して歌を詠みました。その後、九州の炭鉱王と結婚しますが、社会運動に奔走する学生・宮崎龍介（みやざきりゅうすけ）と恋に落ち、夫と絶縁します。

宮城県で生まれた原阿佐緒は、日本女子美術学校在学中の頃に歌を作りはじめ、与謝野晶子にも才能を認められました。

大阪府で生まれた茅野雅子（ちのまさこ）は「明星」に参加し、与謝野晶子・山川登美子（やまかわとみこ）とともに合同歌集『恋衣』を刊行しました。

柳原白蓮自筆色紙
「秋の風こよひのほそき月かげも愁とならできみにふけかし」（No.16）